

電子文書化された三浦梅園の主著『玄語』

赤星哲也^{*}

akahoshi@mc.nbu.ac.jp

北林達也^{**}

baika@fat.coara.or.jp

^{*} 日本文理大学 NBU メディアセンター
〒870-03 大分県大分市一木1727

^{**} 三浦梅園研究所
〒870 大分県大分市今津留3-4-21-403

江戸中期の思想家、三浦梅園の主著『玄語』を電子文書化し、これをもとに解釈作業を試みた。その結果、『玄語』は梅園が構想した地球生態系に関する論理モデルの命題群の集まりであり、これを対称性と階層構造、図による関連づけなどの明確な構造のもとに記述したものであることが判明した。これは『玄語』そのものが「紙」メディア上に表現された「ハイパーテキスト」であることを示唆していると報告者らは考えている。本稿ではこの間の経緯の詳細を報告するとともに、今、報告者らが試みている『玄語』のハイパーテキスト化構想の概要について紹介する。

A try of the interpretation of the Baien Miura's main text "GENGO" on computer

Tetsuya Akahoshi^{*}

Tatsuya Kitabayashi^{**}

^{*} NBU Media Center, Nippon Bunri University
1727, Ichigi, Oita-shi, Oita, 870-03, Japan

^{**} Miura Baien Research Institute
3-4-21-403, Imatsuru, Oita-shi, Oita, 870, Japan

We edited the "GENGO" text on computer, and tried the interpretation of it. The "GENGO" text was written by Baien Miura who was the thinker at the middle of the Edo period. As a result, we discovered that it was the group of propositions about the logical model on the earth's ecological system, and that it was described with the clear construction. These facts suggest that the "GENGO" text was hypertext on paper media. We report the details of our try, and give an outline roughly about the project that we will edit the "GENGO" text on a hypertext system.

1. はじめに

人文科学、特に、テキストの解釈を主たる研究対象とする哲学や思想、文学などの研究領域においては、今やコンピュータは欠かすことのできない存在となりつつある。

特に、テキストをコンピュータ上で処理できる形にした、いわゆる「電子文書」を用いた解釈作業の試みは、主として「検索」機能の利用によって従来の人的、あるいは時間的な制約を大幅に軽減するとともに、「紙」メディアの上だけでは困難であった多様な読書様式をも可能にした。

本稿ではこの電子メディア上の多様な読書様式の可能性を示す研究の一例として、江戸中期に豊後の国（現在の大分県）で活躍した思想家「三浦梅園」の主著『玄語』テキストに対する新たな解釈の試みを取り上げ、その概要を報告する。

また、テキストの電子化（電子文書化）はインターネットなどのネットワークを利用することにより、電子文書そのものを研究のためのパブリックドメインとして機能させる可能性をも開いている。しかし、現在のコンピュータ技術、とりわけ文字（文字コード）の扱いについては未解決の問題も多い。本稿では電子文書化によるテキスト解釈の研究手法の可能性と、それに伴う問題点についてもあわせて考察してみたい。

2. 電子文書による「玄語」解釈の試み

2.1 三浦梅園と「玄語」

三浦梅園（享保八～寛政元年、1723～89年）は近世日本を代表する思想家であり、そ

の主著には『玄語』『贅語』『敢語』の、いわゆる「梅園三語」がある。内藤湖南はこれを評して、「三百年間、其の一毫人に資る所なくして、段々たる発明創見を説を為せる者、富永仲基の『出定後語』、三浦梅園の『三語』、山片蟠桃の『夢の代』、三書是のみ」（『近世文学詩論』1897）と語り、その思想としての独創性を高く評価している。

なかでも『玄語』は梅園の思想体系を総括したテキストとして知られているが、その内容があまりに難解であったため、今なお解釈には定説というものが無い。これは『玄語』が梅園自身の造語（條理語という）によってのみ記されており、古典旧籍からの引用がまったく見られないこと、條理語の定義もまた條理語を用いて行われていること、『玄語』には曼陀羅に似た図（玄語図）が160余点もあり、この玄語図との関連によって條理語相互の関係が定義されていること、などによると思われる。

このことはまた、『玄語』を印刷物として忠実に復元することの障害ともなっており、梅園没後120余年を経て初めて印刷物として出版された『梅園全集上下二巻』（明治45年）をはじめとして、今日まで印刷出版されたものはみな何らかの意味で『玄語』テキストのサブセット版といわざるを得ない。誤解を恐れずにいえば、『玄語』のテキストとしての難解さは「紙」メディアとのなじみにくさに起因しているのではないかと報告者らは考えている。したがって、詳しくは後述するが、報告者らは電子メディア上の、ハイパーテキストシステムにおいてこそ『玄語』の忠実な復刻と、これを利用したテキスト解釈のための環境が実現できるのではないかと考えている。

2.2 『玄語』の電子文書化作業の経緯

『玄語』の電子文書化への取り組みは、まず浜田晃氏(現・東邦高校国語科教諭)が1982年から1987年にかけて『梅園全集上下二巻』に準拠して行った。以下、浜田氏によって電子文書化された『玄語』を浜田版『玄語』と略すことにする。浜田氏は『玄語』の他にも、『養語』(全13巻)についても電子文書化を行っている。

報告者の一人、北林はこの浜田版『玄語』を利用して、1992年から『玄語』の訓読を電子文書として作成することにし、パーソナルコンピュータ上の日本語ワープロソフトを用いて作業を進めていく過程で、『玄語』テキストに次のような「構造」があることを発見した。

- (1) 條理語、及び條理語からなる文が対称性をもって記述されていること
- (2) 『玄語』の記述全体が階層構造をなしていること

この2つの構造を確認し、さらにその詳細を解明していく作業に役立ったのがエディタとgrepである。日本語ワープロソフトはコンピュータ上でテキストを「書く」ための道具ではありえても、これを「読む」ための道具としては明らかに役不足である。これに対し、エディタとgrepの組み合わせは電子文書の備える多様な読書様式の可能性、とりわけ、用語「検索」に基づくテキスト解釈作業の大幅な省力化を可能とする。エディタとgrepという容易に入手できるツールを利用することで、しかも、パーソナルコンピュータ程度の安価なコンピュータ環境でテキスト解釈に関わる多くの作業が軽減され、かつ従来の「紙」メディア上のテキストでは思い

もよらなかった、より複雑な解釈作業をも可能にしてくれるという事実はテキスト解釈研究の手法としてもっと広く知られて然るべきであろう。

2.3 構造化されたテキストとしての『玄語』の世界

『玄語』の記述上の特徴の一つとして、黒点と白点の2つの読点の使用があげられる。北林はこの黒白の読点に注目し、浜田版『玄語』を黒点、白点がそれぞれ対称に配置されるように編集し直してみた。編集にあたっては黒白の各読点で区切られた文章を、エディタでいう論理行1行に対応させることにした。こうして黒白の読点に注目して分割し並べ直したものが「『玄語』検索用基本テキスト」である。以下、これを北林版『玄語』と呼ぶことにする。

この北林版『玄語』を編集していく過程で『玄語』内の用語(條理語)、及びこれを含む文が対称性をなしていることが明らかとなったが、さらにこの電子化されたテキストに対してgrepを用いた検索を試みたところ、各條理語はその対称となる語を有すと同時に、全体として階層構造の形に記述されていることも判明した。

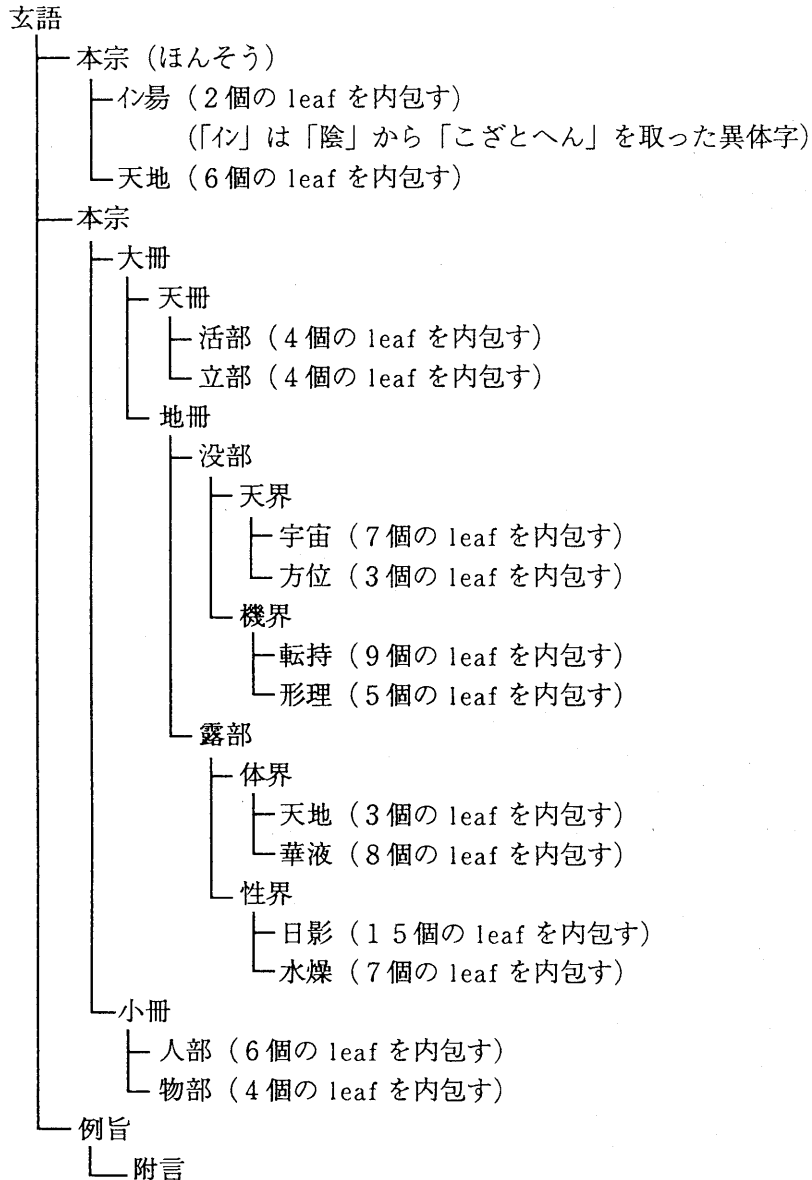
階層構造に着目して『玄語』テキストを編集し直すと86のテキストに分割できる。ここで、最下位に位置する階層をleaf(葉)、より上位の階層をtree(木)と定義すると、各テキストはleafの階層に配置される。treeは二分木構造を成しており、leafは任意の複数個に分かれ、それぞれに條理語からなる意味(命題)を内包している。

なお、この『玄語』が持つ記述、ないしは表現上の「構造」は、単に表現上のレベルというにとどまらず、梅園自身が構想し続けた

思想の構造体系そのものではないかと報告者らは考えている。すなわち、『玄語』とは梅園が構想した地球生態系の論理モデルを

言語によって記述した論理的写像に他ならない。しかし、この点についての論証は今後の課題である。

『玄語』の階層構造



3. 電子文書としての『玄語』の可能性と問題点

3.1 ハイパーテキストとしての『玄語』

『玄語』が構造化されたテキストであること、さらに玄語図を通して條理語相互の關係が表現されていることなどから、我々は『玄語』をハイパーテキストであると考え、適当なハイパーテキストシステム上にこれを実現することを試みている。その証左としては、たとえば、『玄語』の「例旨」(序文に相当するもの)に「どこから読み始めてもよいし、どこで読み終えてもよい。斜めに読んでもよいし、上から下に、下から上に読んでもよい」といった内容の記述が見られることをあげることができる。

このハイパーテキスト版『玄語』を用いることで、『玄語』の思想体系の「構造」についてのより詳細な説明が進むことはもちろん、『玄語』テキスト解釈作業の共通のデータベース(パブリックドメイン)として機能することが期待できる。

以上のような理由により、我々は現在、『玄語』の、

- (1)HTML化によるWWW上での公開
 - (2)HyperCardによるドキュメント化
 - (3)Expanded Book Toolkit IIによるドキュメント化
 - (4)BTRON-OS上でのドキュメント化
- などを試みている。(2)から(4)についてはInternet上での公開の他、CD-ROM化も検討している。

3.2 漢字の問題～BTRONと人文科学研究

しかし、電子文書によるパブリックドメイン化にあたって、障害となる問題も少なくない。最大の問題点は漢字の扱いである。これは『玄語』テキストに限らず、漢字で記されたすべての古書典籍、とりわけ中国哲学に関するテキストの電子文書化に共通する問題であり、最低でも4万文字は必要であるといわれている。

もっとも『玄語』の場合は幸いにもJIS補助漢字(約6千字)を用いることで主要な用語のほとんどをカバーすることができる。現在のところ、このJIS補助漢字をサポートしたOSとしては唯一BTRON-OSがあるのみである。さらにBTRON-OSでは「実身・仮身機能」を利用することでハイパーテキスト・ドキュメントを容易に構築できるため、『玄語』の電子文書化を進める上で、極めて有力なプラットフォームであるといえよう。

以上のような事情に加え、多言語対応化を他のどのOSよりも積極的に押し進めていることなどから、一部の人文科学研究者の間でBTRON-OSを再評価する動きがあることも付言しておきたい。

4. 終わりに

梅園の主著『玄語』の解釈をめぐって、テキスト解釈を中心とした人文科学研究におけるコンピュータの思考支援の可能性について考察した。今後は、『玄語』のハイパーテキスト化作業を通して、『玄語』の思想体系の究明を進める一方、ハイパーテキストによる思考の外在化と操作性の可能性についても研究を進めていきたい。特に、『玄語』に顕著なように、梅園の思想には彼の独特な思考の構想力、「技法としての知」が大きな影響を与えているように思われる。この技法

としての知のスタイルを究明することは、コンピュータによる思考支援環境のデザインにも有益な情報をもたらすものと我々は確信している。

終わりにあたって、我々に協同研究の機会を与えてくれた大分合同新聞社・経営企画室長、高浦照明氏にこの場を借りて深く感謝の意を表したい。

参考文献

梅園会:梅園全集(復刻版),名著刊行会,1984
高橋正和:三浦梅園の思想,ペリかん社,1981
田口正治:三浦梅園,吉川弘文館,1972

山田慶児,吉田忠:日本の名著・三浦梅園,中央公論社,1982

林一誠:現代語訳・多賀墨卿君にこたふる書～条理学研究の一環として,梅園研究所,1983

柏木歩:これならわかる知的 MIFES 活用,学習研究社,1989

奥出直人:思考のエンジン,青土社,1991

黒崎政男:哲学者クロサキの MS-DOS は思考の道具だ,アスキー,1993

横井俊夫:日本語の情報化,共立出版,1990

J. D. Bolter:ライティング・スペース,産業図書,1994

補遺

梅園は「條理語」の定義に「・・・者・・・也」という文型を原則として与えている。北林版『玄語』の訓読テキストでは、これを基本的に「・・・なる(する)者は・・・なり」とした。従って、「者」かつ「也」を含む行を検索すれば條理語の定義はもれなく抽出できることになる。以下に、その検索例を示す。なお、G0023U-002 は、梅園全集に収録された『玄語』の23頁上段2行を、G0023L-013 は23頁下段13行をそれぞれ指すものとする。

- 197: G0023U-002 気なる者は天なり〉之を活する者は神気なり〉
198: 物なる者は地なり〉之を立する者は本気なり〉
257: G0023L-013 物立し神活する者は〉此の天地を成す所なり〉
258: G0023L-014 性体合し〉気物分するは此の天地を為す者なり〉
312: 闕なる者は唯没なり〉
328: G0024L-010 無なる者は無にして而して後無なり〉
431: 気なる者は天なり〉
432: 物なる者は地なり〉
498: 天なる者は気なり〉成本〉
499: 地なる者は物なり〉成根〉
636: G0033L-011 無質なる者は〉有質の気なり〉
637: 有質なる者は〉無質の質なり〉故に
641: 降なる者は静なり〉

(以下省略。全16,469行中868行がヒット)